

北原遺跡

KITAHARA SITE

県営圃場整備事業に伴う
埋蔵文化財調査報告書

1988

山梨県明野村教育委員会
峡北土地改良事務所

序

今般、昭和62年度県営圃場整備事業に伴いまして北原遺跡の発掘調査を実施いたしました。本事業関連の埋蔵文化財調査は、既に、清水端遺跡、普門寺遺跡の調査が完了していた所ですが、事業の進行に従い、さらに新遺跡が発見された訳でございます。

調査は、暑中並びに厳寒に実施いたしましたが、この結果は、平安時代初頭の集落の一角が明らかになり、その成果には多大なものがございました。今回、ここにその成果を報告できますことは誠に欣快にたえません。この資料が広く活用されますことを願ってやみません。

調査を遂行するにあたり、峡北土地改良事務所、山梨県教育委員会文化課をはじめ関係各位には、多大な御支援、御協力をいただきましたことを厚く御礼申し上げます。

昭和63年3月

明野村教育委員会
教育長 船 瀬 敏 夫

例　　言

1. 本書は、山梨県北巨摩郡明野村浅尾新田北原地区県営圃場整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査の概要を記したものである。
2. 発掘調査は2次にわたり、第1次は昭和62年6月29日～8月4日、第2次は昭和62年10月28日～12月15日までおこない、引き継ぎ整理と報告書の作成をおこなった。
3. 発掘調査の面積は約3,600m²である。
4. 本書の執筆・編集は大森隆志がおこなった。ただし、土師器・須恵器に関しては、吉岡弘樹氏（静岡県伊東市教育委員会）の観察結果を大森がまとめたものである。
5. 石器・石製品の石質の鑑定は、柴田徹氏（東京都立上野高校教諭）にお願いした。
6. 本調査に関する資料の一切は、明野村教育委員会に保管されている。
7. 発掘調査、報告書作成にあたって次の各位にはとくに御指導、御教示を賜わった。記して謝意を表する次第である（敬称略）。

桜井　真貴　　新津　健　　河西　学　　八巻　与志夫　　清水　博

8. 調査参加者

宮川　寛　　石黒　晃　　福田すみ江　　深沢あさ子　　三塚てつ子　　福田さつき
水上　治良　　入戸野きぬ代　　雨宮　敏子　　篠原　啓子　　水森　広徳　　伊東　昭一
伊藤さつき　　清水みゆき　　清水栄枝　　清水恵三子　　奥水たつ子　　伊東千代美
吉岡　弘樹

本文目次

例言

I. 調査の経過.....	1
II. 調査の概要	
A. 繩文時代の遺物.....	3
B. 平安時代の遺構と遺物.....	5
a. 住居址.....	5
b. 掘立柱建物跡.....	12
c. 土坑.....	13
d. ピット群.....	15
e. 遺構外出土遺物.....	17
C. 平安時代以降の遺物.....	19
参考文献.....	19

図版目次

第1図 北原遺跡の位置.....	1	第11図 5号住居址.....	8
第2図 調査範囲.....	2	第12図 5号住居址カマド.....	8
第3図 遺構配置図.....	折込	第13図 6号住居址.....	10
第4図 繩文土器.....	4	第14図 平安時代の遺物(1).....	11
第5図 1号住居址内貯蔵穴.....	5	第15図 平安時代の遺物(2).....	12
第6図 1号住居址.....	5	第16図 1号掘立柱建物跡.....	13
第7図 2号住居址.....	6	第17図 2号掘立柱建物跡.....	14
第8図 3号住居址.....	6	第18図 土坑.....	15
第9図 4号住居址.....	7	第19図 第1ピット群.....	16
第10図 4号住居址内貯蔵穴.....	7	第20図 第2ピット群.....	17
		第21図 第3・第4ピット群.....	18

写 真 図 版

- 図版1 航空写真
- 図版2 遺跡遠景 第II地点全景
- 図版3 1号住居址 2号住居址
- 図版4 3号住居址 4号住居址
- 図版5 5号住居址
- 図版6 6号住居址
- 図版7 1号掘立柱建物跡 2号掘立柱建物跡
- 図版8 土坑
- 図版9 第1ピット群 第2ピット群
- 図版10 第3ピット群 第4ピット群
- 図版11 縄文土器(1) 縄文土器(2)
- 図版12 石器 平安時代の遺物(1)
- 図版13 平安時代の遺物(2)
- 図版14 鉄製品・古銭 磁石・ひで鉢

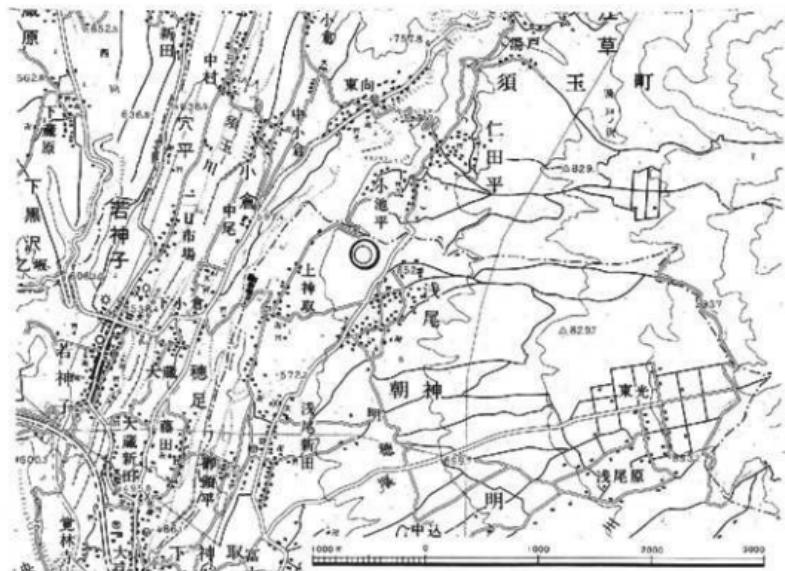
I 調査の経過

(1) 1次調査

昭和62年6月29日～8月4日 昭和62年1月の確認調査で発見された住居址（1号住居址）を中心に、約1,200m²にわたり表土剥ぎをおこなった。その結果、平安時代の住居址2基（確認調査分を含む）、土坑1基、ピット群4ヶ所、及び、平安時代の土器片多数を発見した。調査地域は田普請の時にかなり削平されており、1号住居址などは、西側は住居址の立ちあがりが確認できず、その他の部分でわずかに10cm弱の掘り込みが確認できた程度であった。

(2) 2次調査

昭和62年10月28日～12月15日 県営圃場整備事業の秋施工が、1次調査隣接地でおこなわれることになり、事業計画地域内の埋蔵文化財確認調査をおこなった結果、3つの地域で遺構・遺物を発見した。ひきつづき、これら3ヶ所を拡張したところ、平安時代の住居址4基、土坑3基、掘立柱建物跡2基、縄文土器集中出土地点1ヶ所を確認した。第2図網点部分は、遺物が発見されたが、盛土される部分なので本調査の対象外にしたところである。将来、この部分に開発が及んだ場合には、調査が必要である。



第1図 北原遺跡の位置 (◎印)



■ 盆土部分（未調査）

■ 調査範囲

(I : 1次調査・II : 2次調査)

0

100m

第2図 調査範囲 ($\lambda 2,000$)

II 調査の概要

A 繩文時代の遺物

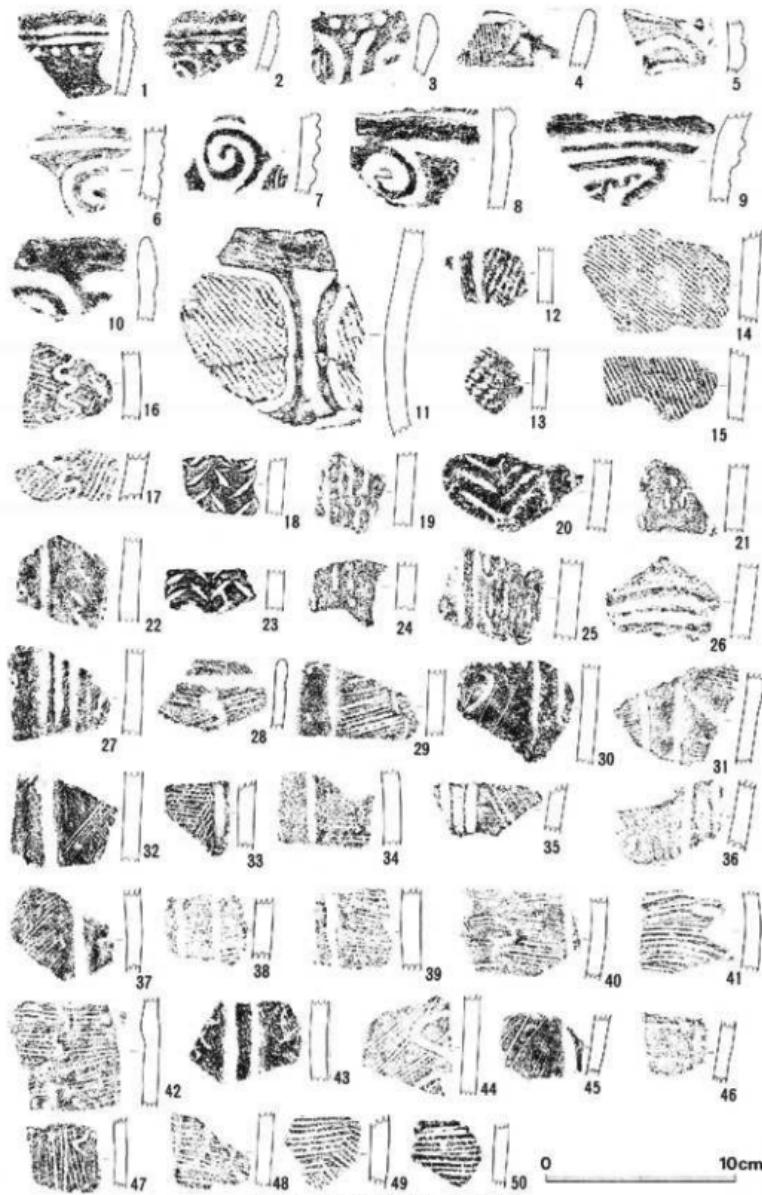
繩文時代の遺物は全て第2次調査時における「縄文土器出土地区」から出土した。出土地区は、西へ向かう傾斜地であるので、上器などの遺物は東側からの流れ込みの可能性が考えられる。上器・石器、いずれも縄文時代中期後半に属するものである。土器は、その多くが表面の風化が著しくて文様がはっきりしたものは少なかった。比較的よい状態のものを図版に示した。以下、主なものについて簡単な説明を加えよう。

a 土器 (第4図、図版11)

- 1・2：同一個体の土器。口縁部に円形刺突文がある。その下に渦巻文がみられる。
- 5～8：いずれも渦巻文がみられる。
- 12：縄文に沈線を施したもの。
- 13～15：縄文だけがみられる。
- 16・17：縄文を地文とし、沈線の蛇行懸垂文が施されている。
- 18・20・22・23：綾杉状沈線文、所謂「ハの字文」がみられる。中期末葉と思われる。
- 19・21・24・25：いずれも刺突文を地文としたもの。
- 26・27：隆線がみられる。
- 28：口縁直下に一本の沈線を有し、そこから蛇行懸垂文が施されている。地文は条線文。
- 29・31・32・34～38：条線文を地文とし、磨消縄文がみられる。
- 30・33・39・40・45：条線文に沈線が施されている。
- 41・42・44：条線文を地文とし、沈線の蛇行懸垂文が施されている。
- 43：隆線がみられる。46～50：条線文だけのもの。

b 石器 (図版12上段)

- 2：剥片。石質：頁岩。
- 3：門石。石質：安山岩。表面、裏面、側面、に凹を有する。長さ9cm、幅7cm、厚さ5cm、重さ340g。
- 4：門岩。石質：安山岩。表面、裏面、側面、に凹を有する。長さ9cm、幅8.5cm、厚さ4.5cm、重さ380g。
- 5：凹石。石質：安山岩。表面、裏面、側面、に凹を有する。長さ16cm、幅11.5cm、厚さ5cm、重さ1050g。



第4図 繩文土器 (S = 1 : 3)

B 平安時代の遺構と遺物

a 住居址

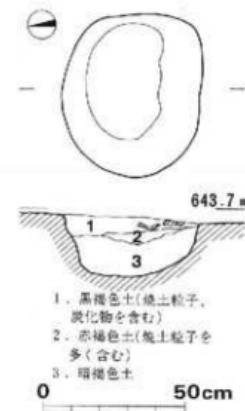
1号住居址（第5図、第6図、図版3）

昭和62年1月に行われた確認調査の際発見されたもの。北原遺跡発掘調査の契機となった遺構である。

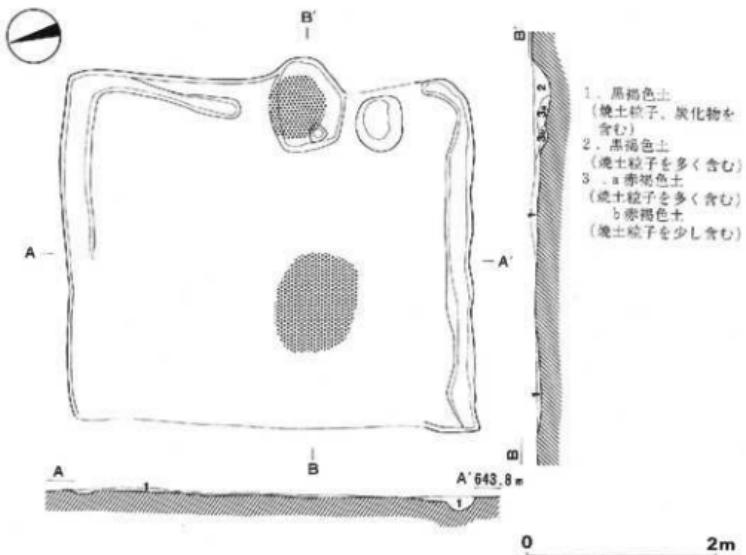
（形状・規模） 方形プランを呈し、東西370cm、南北440cmの規模である。

（カマド） 東壁のはば中央に位置する。ロームの削平が著しく、ほとんどこわされていた。

（床面・壁） 床面はほぼ平坦。床面中央部が長径100cm、短径80cmの範囲で焼けていたが、炉とは言い難い。周溝はほぼ全周するものと思われるが、遺構西側の削平が著しくて確認できなかった。西壁の立ち上がりも同様にはっきりと確認できなかつた。



第5図 1号住居址内貯藏穴
(S=1:20)



第6図 1号住居址 (S=1:60)

(その他の施設) カマド右側に貯蔵穴がある(第5図)。土師器の壺が1個体分出土した。

(出土遺物) 壺(第14図1、図版13-1)：貯蔵穴出土。口径10.9cm、底径5cm。乳褐色を呈し、焼成良好。内面から外面中位までナデ。中位以下に指頭圧痕あり。鉄(図版14上段1)。

(時期) 出土遺物より、9世紀後半と思われる。

2号住居址(第7図、図版3)

(形状・規模) 住居址の1つのコーナー付近だけしか発掘できなかった。北側は農道、東側は石垣があり調査不可能であった。

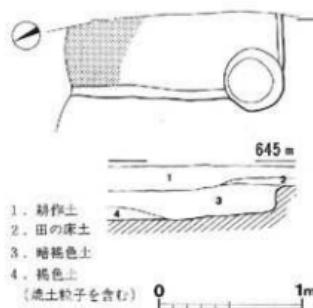
(カマド) 発掘した部分にはない。

(床面・壁) 発掘した部分の北側の床が焼けている。床面はほぼ平坦。

(その他の施設) ピットが1つ発見された。深さ22cm。

(出土遺物) 蓋形土器(第14図2、図版13-2)が出土した。つまみ部欠。内外面ともにナデ調整。

(時期) 出土遺物より、9世紀後半と思われる。



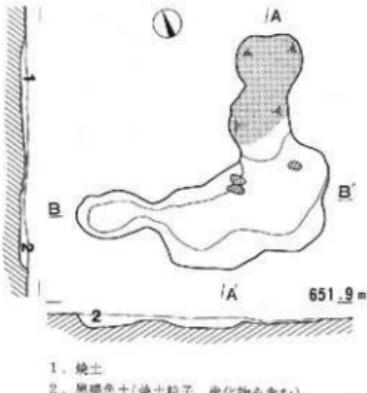
第7図 2号住居址(S=1:40)

3号住居址(第8図、図版4)

削平された部分が著しく、カマドの周辺だけが残っていた。カマドは若干のくぼみを残し、くぼみの底は、よく焼けていた。ソデの部分であったと思われるところには、礫片が3個残っていた。平均して、約5cmの擦り込みを確認した。

(出土遺物) カマド右脇の床面から壺が出土した(第14図3、図版13-3)。口径17.1cm、底部径6.85cm。焼成は良好だが、やや軟質である。色調は乳褐色。内外面ともに、ナデ調整。

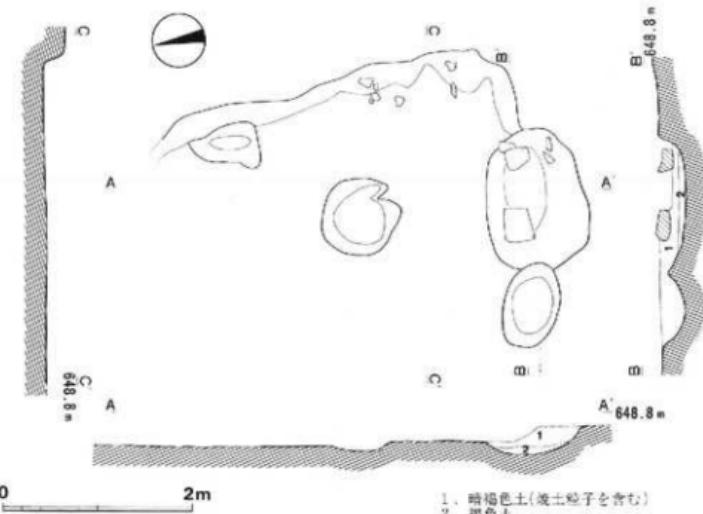
(時期) 出土遺物より、9世紀後半と思われる。



第8図 3号住居址(S=1:40)

4号住居址(第9図、図版4)

(形状・規模) 残存部は、東側が約380cm、



第9図 4号住居址 (S=1:60)

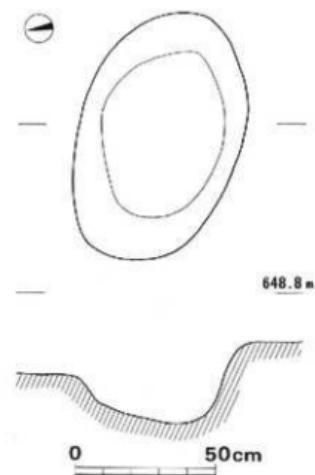
南側が約300cm。北側と西側は削平されていて、プランが確認できなかった。

(カマド) 東側（東カマド）と南側（南カマド）にある。東カマドは遺存状態が悪い。カマドの掘り込み底部が焼けで固くなっているものの、ソデの部分には、少數の礫片が残っているだけであった。南カマドには、大きな軽石が2個残っていた。

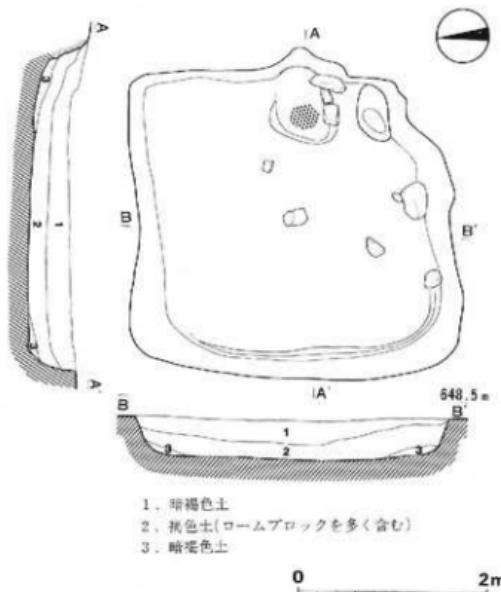
(床面・壁) 床は、ほぼ平坦。壁は、東側と南側で確認できた。

(その他の施設) 東側（深さ約20cm）及び中央（深さ約10cm）にピットがある。どちらも柱穴ではない。南カマドの西側に貯蔵穴がある。底部から砾石が出土している。

(出土遺物) 須恵器台付皿（第14図4、図版13-4） 実測図のスクリーントーン部分は釉がかかっている範囲。内外面ともに釉がかかっている。焼成は良好、色調は淡



第10図 4号住居址内貯蔵穴 (S=1:20)



第11図 5号住居址 (S=1:60)

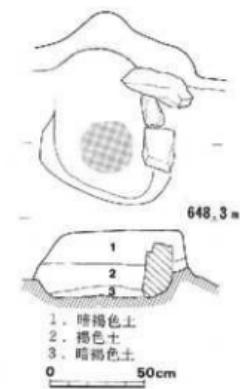
乳灰色。底部は回転糸切り後ナデ調整。外面はヘラ削り。口唇部から内面全体は、ナデ調整。高台は取り付けた後に、ナデで整形。9世紀の中頃のものであろう。皿（第14図6）：床面直上出土。焼成は良好であるが、軟質。色調は乳褐色。内外面ともに、ナデ調整。10世紀後半のものであろう。須恵器の大甕の破片（第15図31、図版12）。砥石（図版14下段3）：南カマド脇の貯蔵穴底部出土。石質は安山岩。断面六角形。長さ10cm、幅9cm、厚さ8.5cm。重さ539g。鉄製品（図版14上段2）：刀子と思われる。

（時期） 出土遺物より、9世紀～10世紀。

5号住居址（第11図、第12図、図版5）

（形状・規模） 方形プランを呈し、東西340cm、南北340cmの規模である。

（カマド） 東壁にある。掘り込み部分は非常によく焼けてい



第12図 5号住居址カマド (S=1:30)

る。片側だけに袖石が残っていた。

(床面・壁) 床は、ほぼ平坦。掘り込みは約40cmある。西側に溝がある。

(その他の施設) カマドの南側にピットがある(深さ14cm)。

(出土遺物) 壁(第14図5、図版13-5)：床面直上から出土。口径12.1cm、底径4.7cm。焼成良好であるが、やや軟質。このため摩滅が著しく、整形方法の詳細は不明。内外面ともに、ナデ調整。10世紀後半のものと思われる。坏(第14図7)：外面に指頭圧痕あり。10世紀後半。坏(第14図8)：床面直上から出土。内外面ともに、ナデ調整。10世紀後半。坏(第14図9)：外面は摩滅が著しい。内面は、ナデ調整。坏(第14図10)：床面直上から出土。内外面ともに、ナデ調整。10世紀後半。坏(第14図11)：底部には回転糸切り痕がみられる。外面はナデ調整。9世紀後半。壺底部(第14図12・13)。須恵器の大甕の破片(第15図30)。

(時期) 出土遺物より、9～10世紀のものと思われる。

6号住居址(第13図、図版6)

(形状・規模) 方形プランを呈すると思われる。西側がすでに削平されていた。現存の規模は、東西約300cm、南北約400cm。

(カマド) 東壁にある。カマドのはば中心に支脚の石が立ったまま残存していた。

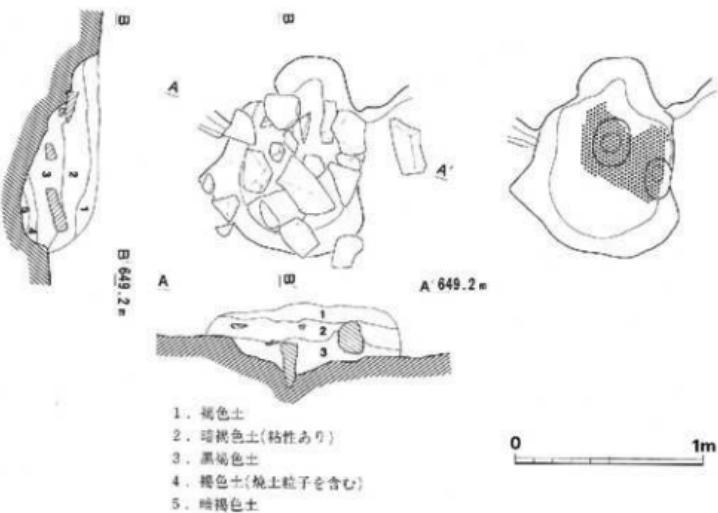
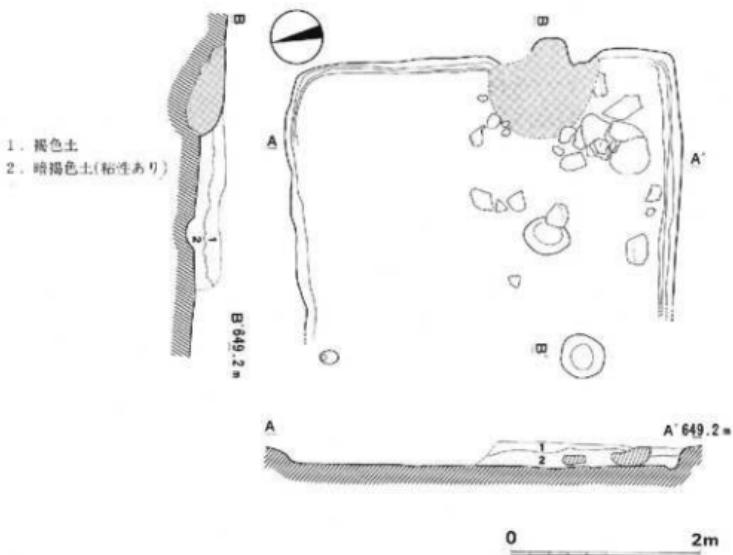
(床面・壁) 床は、ほぼ平坦。周溝が回る。西側は、すでに削平されていて壁は確認できなかった。

(その他の施設) ピットが3個ある。西側の2個は、柱穴であろう。

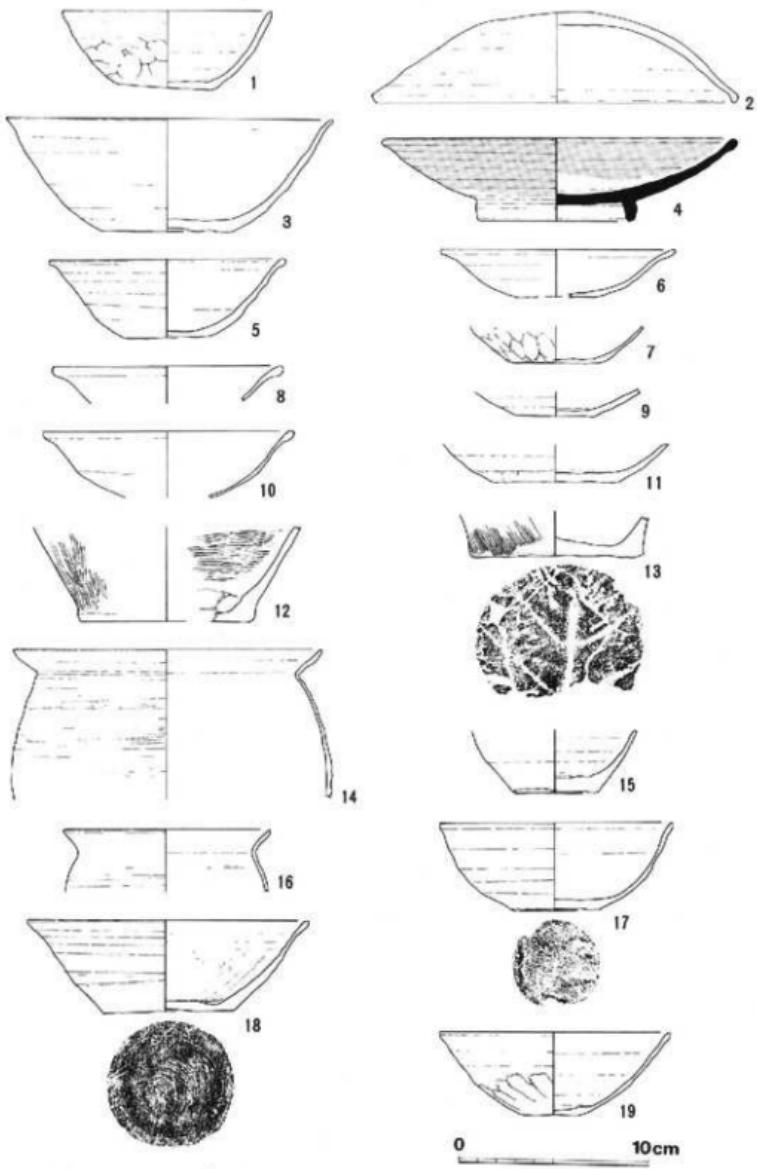
(出土遺物) 壺(第14図14)：カマド内から出土。外面はロクロ整形。内面は、ナデ調整。

壺(第14図16)：床面直上から出土。坏(第14図17、図版13-6)：床面直上出土。口径12.1cm、底部径4.7cm。焼成良好であるが、やや軟質。色調は、内面黒褐色。底部に回転糸切り痕あり。内外面ともに、ナデ調整。9世紀前半のものと思われる。坏(第14図18、図版13-10)：カマド内から出土。口径14.9cm、底部径7cm。焼成良好。色調は、内面黒色。底部に回転糸切り痕あり。内面に暗文を施す。外面は、ヘラ削り。口唇部付近は、ナデ調整。10世紀前半。坏(第14図19)：内外面ともに、ナデ調整。10世紀後半。坏(第15図20、図版13-9)：カマド内から出土。口径12.45cm、底部径5.2cm。焼成は良好であるが、やや軟質。内面は黒色。底部は、回転糸切りの後、ナデ。内外面ともに、ナデ調整。9世紀前半。皿(第15図21、図版13-7)：カマド内から出土。全面ナデ調整。底部は糸切りの後にナデする。9世紀後半。台付皿(第15図22、図版13-8)：カマド底部から出土。内面は黒色。底部は回転糸切りの後、ナデを加える。内外面ともに、ナデ調整。9世紀後半。砥石(図版14下段1)：欠損品。石質は砂岩。重さ130g。砥石(図版14下段2)：石質は流紋岩。重さ162g。

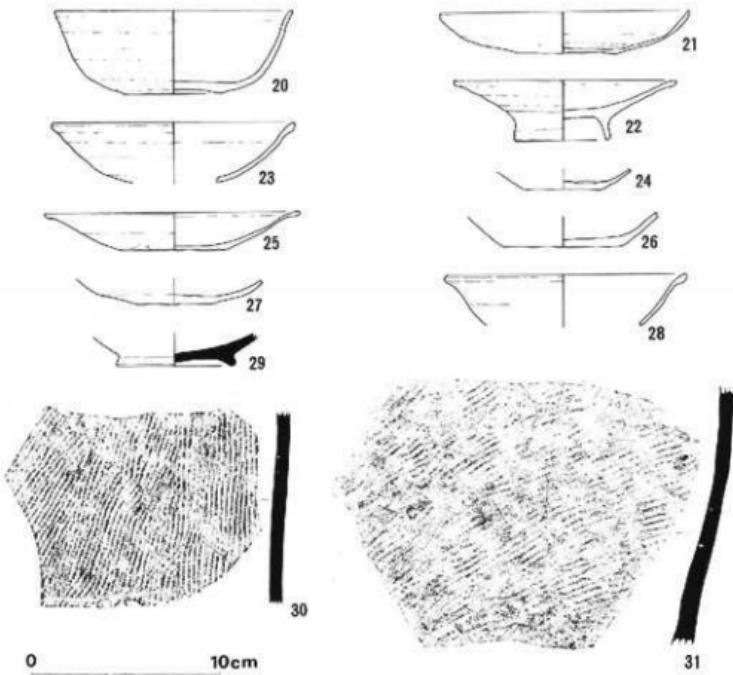
(時期) 出土遺物より9～10世紀。



第13図 6号住居址 (S = 1 : 60, 1 : 30)



第14図 平安時代の遺物(1) ($S = 1 : 3$)



第15図 平安時代の遺物(2) ($S = 1:3$)

b 挖立柱建物跡

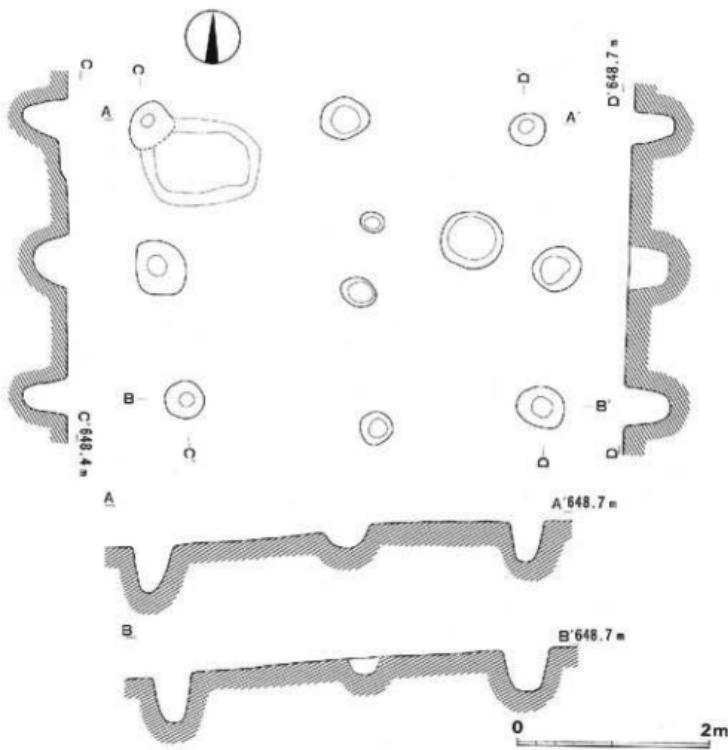
1号掘立柱建物跡（第16図、図版7）

東西方向3本、南北方向3本のピットを有する掘立柱建物跡である。掘立全体の規模は、東西約420cm、南北約330cmである。

2号掘立柱建物跡（第17図、図版7）

東西方向2本、南北方向3本を基本とする掘立柱建物跡である。掘立全体の規模は、東西約320cm、南北360cm～400cm。

上記の掘立柱建物跡は、遺跡内での他の遺構との相互関係から、平安時代のものと考える。



第16図 1号掘立柱建物跡 ($S = 1:60$)

c 土坑 (第18図、図版8)

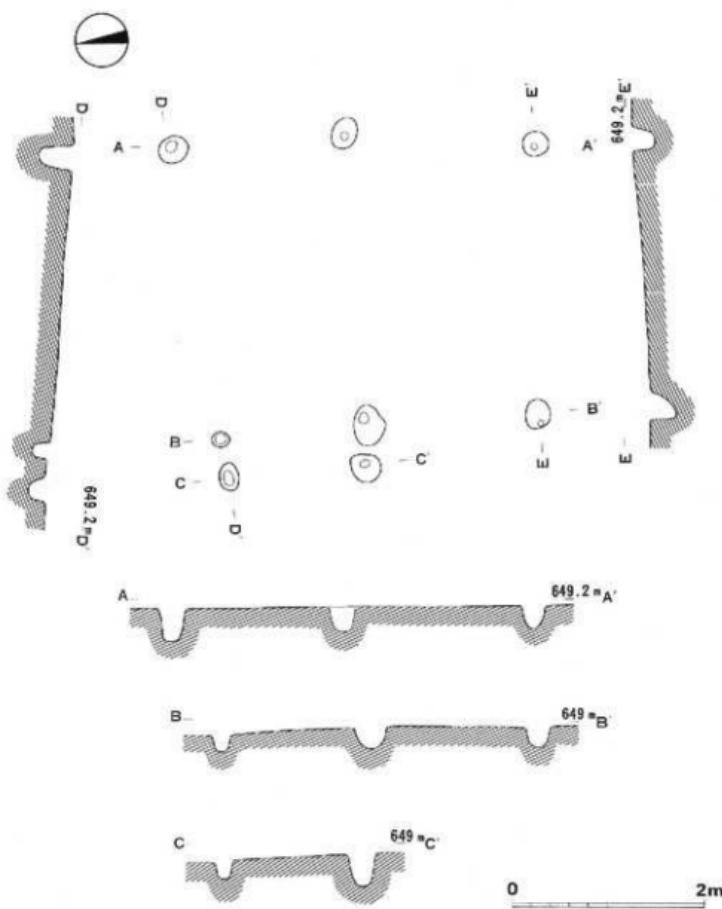
1号土坑：長径80cm、短径70cm、深さ20cm。

2号土坑：長径120cm、短径90cm、深さ30cm。1号掘立柱建物跡のピットと重複している。

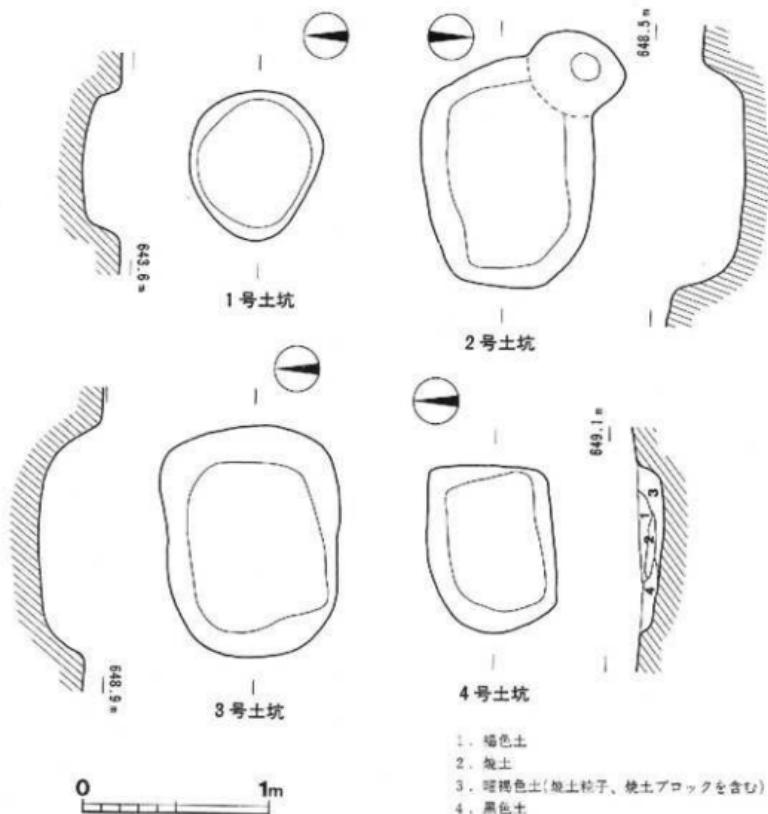
3号土坑：長径120cm、短径90cm、深さ30cm。

4号土坑：長径90cm、短径70cm、深さ15cm。覆土に焼土を含む。

これらの土坑も、掘立柱建物跡同様に時期を決定する資料を出土しなかったが、遺跡内でのありかたによって、平安時代のものと考える。



第17図 2号掘立柱建物跡 (S=1:60)

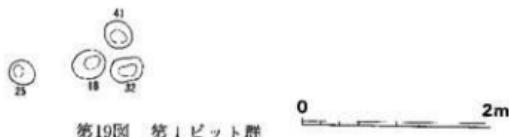
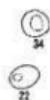


第18図 土坑 (S = 1:30)

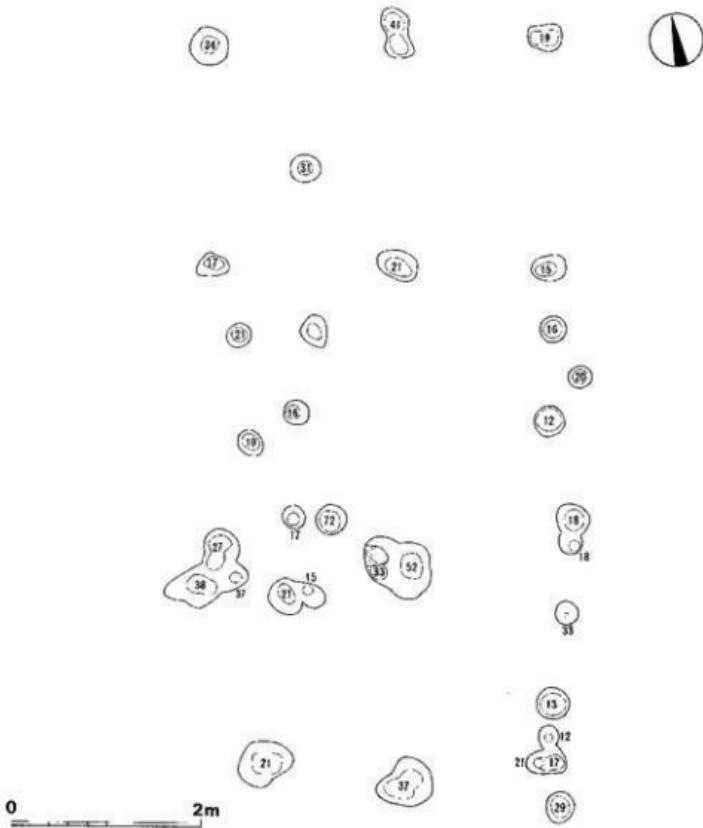
d ピット群

第1次調査地域で4ヶ所発見された。おそらく、掘立柱建物跡のピットであろうが、どの様に組み合うのか不明である。ここでは、ピット群の平面図と、ピットの深度（単位はcm）を示すにとどめたい。

尚、第3ピット群のピットAから鉄製品（図版14上段3）が出土した。



第19図 第1ピット群



第20図 第2ビット群

○ 遺構外出土遺物（第15図23~29）

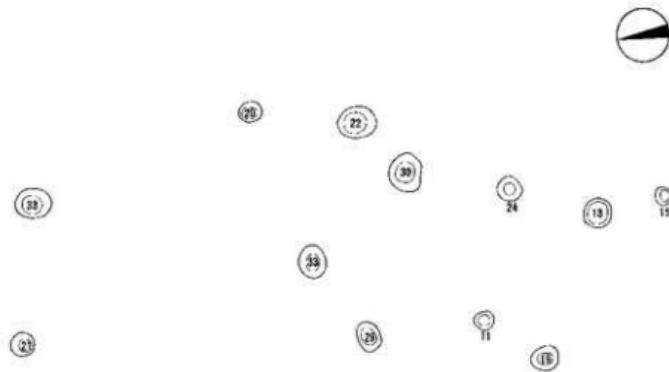
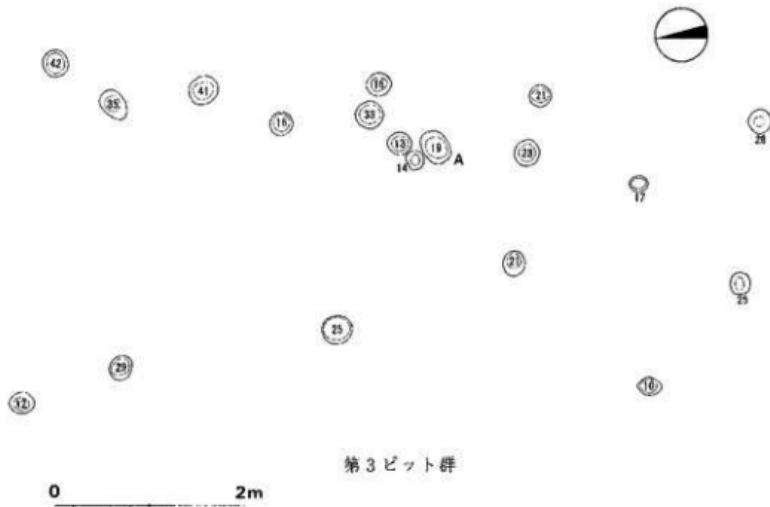
図示したものは全て、4・5号住居址周辺から出土したものである。

23：坏。外表面程は座滅が著しい。それ以外の部分は全て、ナデ調整。10世紀後半と思われる。

24：坏。内外面ともに、ナデ調整。

25：皿。口縁部～内面にかけてナデ調整。その他は、ヘラ削り。10世紀後半と思われる。

26：坏。内外面ともに、ナデ調整。9世紀後半であろう。



第21図 第3・第4 ピット群 (S=1:60)

- 27：壺。磨滅が著しい。10世紀後半と思われる。
- 28：壺。内外面ともに、ナデ調整。10世紀後半と思われる。
- 29：須恵器壺。内外面ともに、ナデ調整。

C 平安時代以降の遺物

ひで鉢（図版14下段4）：第1次調査時に出土。石質は安山岩。中世～近世。重さ685g。

文久永宝（図版14上段4）：第1次調査時に表採。江戸時代。素材は銅で、表面には縁背がふいている。文久銭は、文久3年（1863年）浅草橋銭座、及び、銀庫管轄の東大工町銭座で鋳造されたと言われている。発見された文久銭の書体は草文で、板倉周防守勝静の書とされている。

参考文献

- 1983 「シンポジウム 奈良・平安時代土器の諸問題－柏原国と周辺地域の様相－」
神奈川考古同人会
- 1986 「柳坪遺跡」山梨県教育委員会
- 1987 「普門寺遺跡」明野村教育委員会

図 版



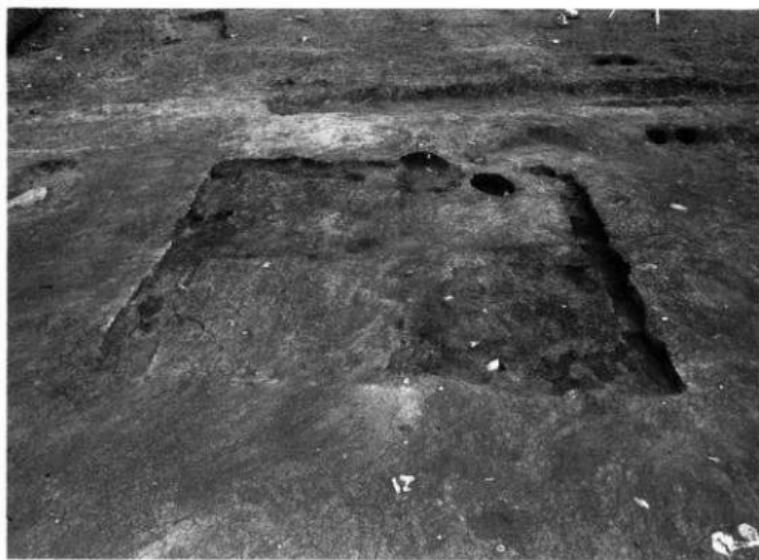
航空写真(○印が遺跡)



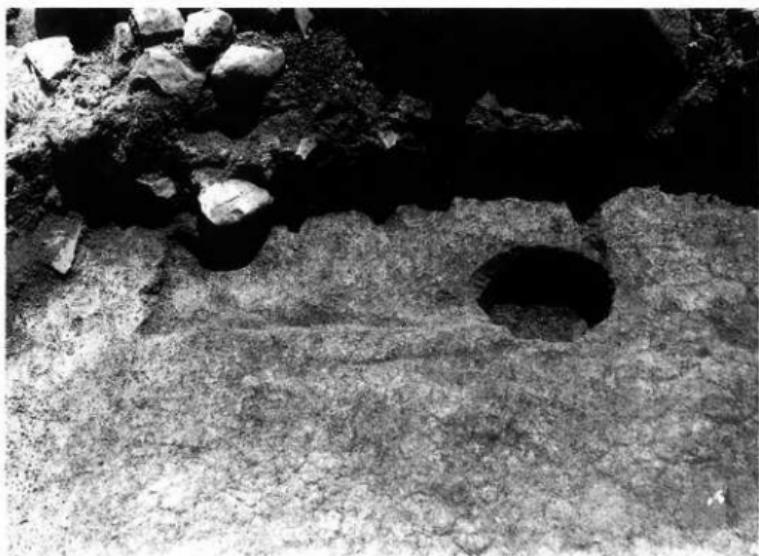
造 路 遠 景 (矢印)



第 II 地点 全景



1号住居址



2号住居址

图版4



3号住居址



4号住居址



5号住居址



5号住居址カマド



5号住居址カマド石（横から）



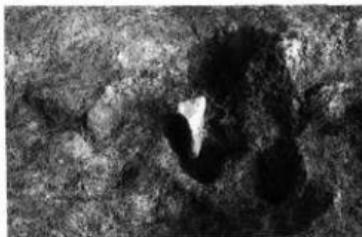
5号住居址カマド石（上から）



6号住居址



6号住居址カマド



6号住居址カマド支脚



6号住居址遺物出土状況



6号住居址遺物出土状況



1号掘立柱建物跡



1号掘立柱建物跡・2号掘立柱建物跡

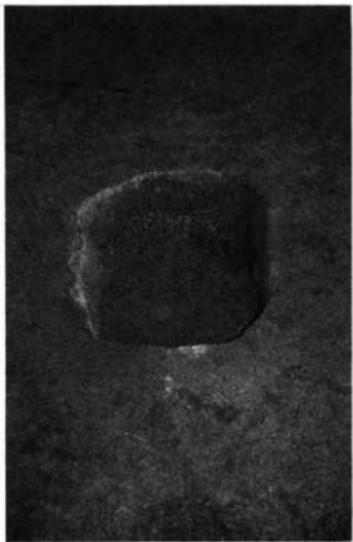
图版 8



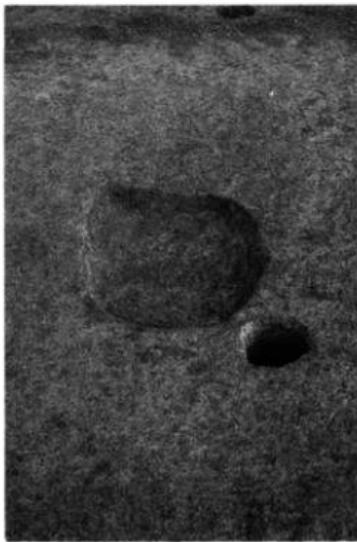
1 号土坑



2 号土坑



3 号土坑



4 号土坑



第1ピット群



第2ピット群

図版10



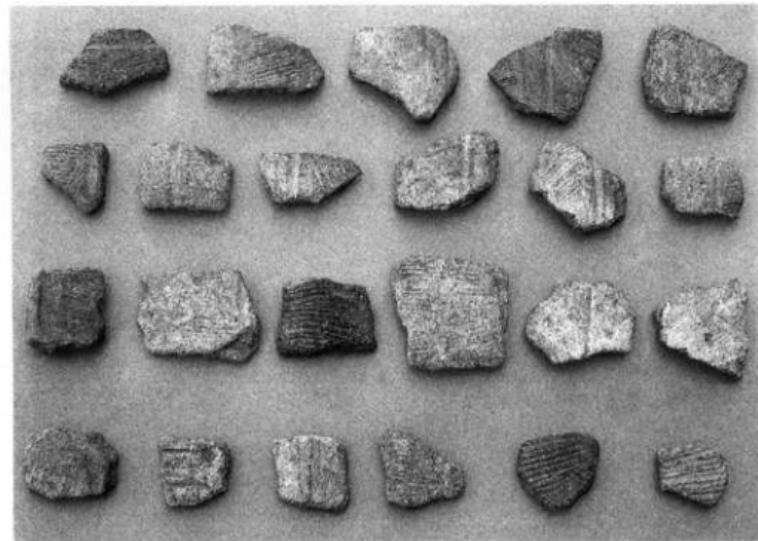
第3ビット群



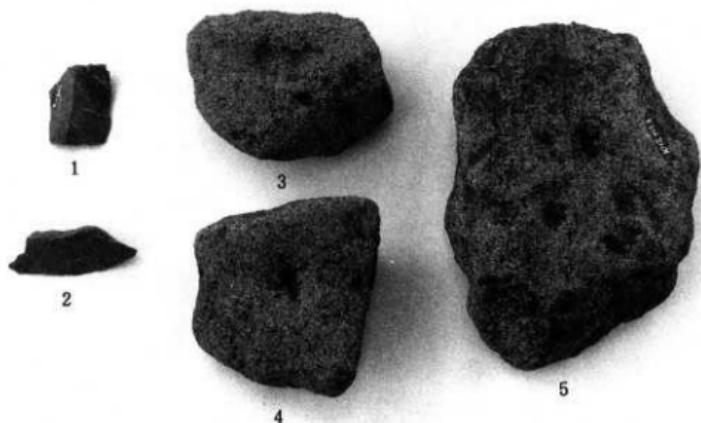
第4ビット群



縄文土器(1)



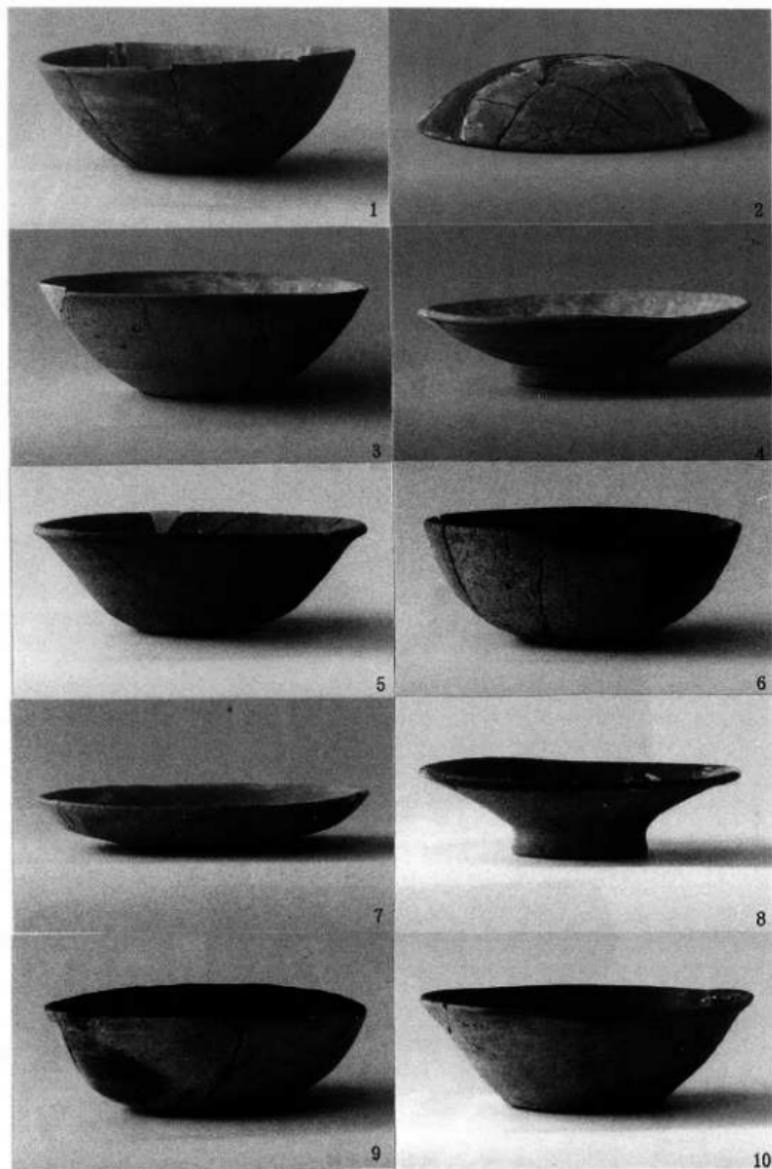
縄文土器(2)



石器

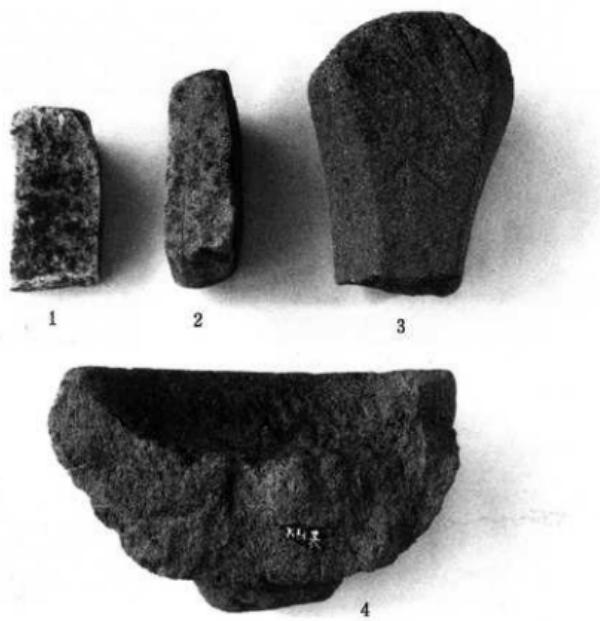


平安時代の遺物(1)



平安時代の遺物(2)

図版14



鉄石・ひで鉢

1988年3月25日 印刷
1988年3月31日 発行

北原遺跡

発行 山梨県明野村教育委員会
峡北土地改良事務所
印刷 合資会社 ヨネヤ印刷



第3図 遺構配置図 (S=1:500)

